

性別違和を持つFemale To Male 当事者における精神的健康とQOLに関する研究

著者	安藤 孟梓
学位名	博士（臨床心理学）
学位授与機関	北海道医療大学
学位授与年度	平成28年度
学位授与番号	30110甲第289号
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064448/

論 文 要 旨

性別違和を持つ Female To Male 当事者における

精神的健康と QOL に関する研究

平成 28 年 度

北海道医療大学大学院心理科学研究科

臨床心理学専攻

安藤 孟梓

論文要旨

問題と目的

Gender Dysphoria (以下 GD) 当事者は、QOL、精神的健康、社会機能の低下、高い自殺未遂行動率が見られることから、医学的、心理社会的援助が強く求められている。さらに GD 当事者が心理療法を求めること、GD 当事者が強い不安、抑うつ症状を示し、治療前の精神的健康が治療後の社会的機能を予測することから、当事者のニーズ (Rachlin, 2002) と治療ガイドライン (WPATH, 2011) の両側面から心理療法が推奨されている。特に、スティグマに基づいた差別被害や暴力被害経験が精神的健康を悪化させることから、スティグマや GD に特有のストレスに対処する重要性が心理療法の介入ターゲットとして挙げられている。しかし、GD 当事者におけるスティグマや GD に特有のストレスが精神健康に影響を及ぼす過程は不明瞭なままである。過程を説明する理論モデルとしては、同性愛・両性愛者の社会的要因、個人内要因に焦点を当て、マイノリティに特徴的な慢性的なストレスが精神的健康を悪化させるとするマイノリティストレスモデル (Meyer, 2003) が挙げられる。マイノリティストレスモデルの適応は、同性愛・両性愛者に限定されず、GD 当事者に対する適応の能性が指摘されているが (Hendricks & Testa, 2012)、GD 当事者に対するマイノリティストレスモデルの適応は、(1) GD 当事者が経験するマイノリティストレス、マイノリティストレスに対するコーピングの特徴が明らかにされていないこと、(2) GD 当事者が経験するマイノリティストレス、マイノリティストレスに対するコーピングを測定する信頼性と妥当性を有する方法が確立されていないこと、(3) GD 当事者の精神的健康、QOL に対するマイノリティストレス過程の媒介要因の影響が明らかにされていないこと、(4) マイノリティストレス過程における認知的評価が媒介要因として含まれていないこと、の4つが問題点として存在する。そこで、本論文でこれらの問題点を解決するために、GD 当事者のうち、性自認は女性だが身体的には男性である Female To Male (以下 FTM) 当事者を対象とした基礎研究を実施した。

FTM 当事者が経験するマイノリティストレスとコーピングの質的検討(研究1)

問題点 (1) を解決するために、質問紙調査による質的研究を行った。その結果、FTM 当事者はさまざまなマイノリティストレスを経験しており、GD 当事者に特徴的なコーピングを用いていることが明らかとなった。継続的比較分析の結果、マイノリティストレスは 14 種類、コーピングは 9 種類に分類されることが示された。

FTM 当事者における精神的健康に関連する要因の測定方法の整備 (研究2, 3)

(2) の問題を解決するために、FTM 当事者が経験するマイノリティストレスおよびコーピングを定量的に測定可能な方法の確立を目的として、質問紙調査を行った。その結果、FTM のマイノリティストレスを測定する 5 因子構造の SIFTM が作成された。

SIFTM は高い内的整合性を有し、4 因子で構成概念妥当性が示された。次にコーピングを測定する 4 因子構造の CIFTM が作成され、十分な内的整合性と内容的妥当性を有する尺度であることが確認された。

FTM 当事者におけるストレス反応, QOL に影響を及ぼす要因の検討 (研究 4)

最後に、第 5 章では、(3)、(4) の問題を解決するために、研究 2、3 で作成された SIFTM、CIFTM を用いて、FTM 当事者が経験するマイノリティストレスと精神的健康、QOL 間の媒介変数の作用を検討した。はじめに多重代入法による欠損値の補完を行い、ストレス反応、QOL とマイノリティストレス、媒介要因の関連を相関分析で検討した。その結果、ストレス反応、QOL とストレス媒介要因との間に相関関係が確認されたことから、階層的重回帰分析を用いて、媒介要因の直接効果と調整効果の検討を行った。解析の結果、「回避・抑制」コーピングがストレス反応と QOL に直接影響を及ぼし、ソーシャルサポートがストレス反応に直接影響することが示された。また、認知的評価のうち、「影響性」と「コントロール可能性」がストレス反応、QOL に直接影響していることが明らかとなった。さらに、マイノリティストレスの経験頻度が高く、「コントロール可能性」が低い状態でストレス反応が低減することが示された。

まとめと提言

FTM 当事者のマイノリティストレス、コーピングの特徴を示したことは、当事者の理解に繋がるとともに、定量的に測定可能な方法の確立は、基礎研究を促進させる有益な研究である。また、FTM 当事者に対する心理療法の介入ターゲットとして、感情の抑制や対人場면을回避するコーピングの減少とソーシャルサポートのリソース確保が、精神的健康と QOL の改善に有用であることを示唆した。また、マイノリティストレスに対する認知的評価の変容の重要性を示したことは、GD 当事者の認知的要因に対する介入の有用性を示唆した初めての研究である。今後、媒介要因の変容が精神的健康、QOL に及ぼす影響について、臨床研究による検討が望まれる。